武蔵野日曜聖書講筵

ペテロと議院

――使徒行伝第４章――

１９９１年４月14日
小池辰雄

サドカイとパリサイ　サンヘドリン　ペテロ聖霊にて満たされ　隅の首石　無学の凡人　聖霊の力　非連続の連続　霊震　「タイタニック号」の詩

【使徒行伝４】

1かれら民に語り居るとき、祭司ら・宮守頭およびサドカイ人ら近づき来りて、2その民を教え、又イエスの事を引きて死人の中よりの復活を宣ぶるを憂い、3手をかけて之を捕えしに、はや夕になりたれば、明くる日まで留置場に入れたり。4然れど、その言を聴きたる人々の中にも信ぜし者おおくありて、男の数おおよそ五千人となりたり。

5明くる日、司・長老・学者らエルサレムに会し、6大祭司アンナス、カヤパ、ヨハネ、アレキサンデル及び大祭司の一族みな集いて、7その中にかの二人を立てて問う『如何なる能力いかなる名によりて此の事を行いしぞ』8この時ペテロ聖霊にて満たされ、彼らに言う『民の司たち及び長老たちよ、9我らが病める者になしし善き業に就き、その如何にして救われしかを今日もし訊さるるならば、10汝ら一同およびイスラエルの民みな知れ、この人の健かになりて汝らの前に立つは、ナザレのイエス・キリスト、即ち汝らが十字架に釘け、神が死人の中より甦えらせ給いし者の名に頼ることを。11このイエスは汝ら造家者に軽しめられし石にして、隅の首石となりたるなり。12他の者によりては救いを得ることなし、天の下には我らの頼りて救わるべき他の名を、人に賜いし事なければなり』

13彼らはペテロとヨハネとの臆することなきを見、その無学の凡人なるを知りたれば、之を怪しみ、且そのイエスと偕にありし事を認む。14また医されたる人の之とともに立つを見るによりて、更に言い消す辞なし。15ここに、命じて彼らを衆議所より退け、相共に議りて言う、16『この人々を如何にすべきぞ。彼等によりて顕著しき徴の行われし事は、凡てエルサレムに住む者に知られ、我ら之を否むこと能わねばなり。17然れど愈々ひろく民の中に言い弘らぬように、彼らを脅かして、今より後かの名によりて誰にも語る事な

からしめん』18乃ち彼らを呼び、一切イエスの名によりて語り、また教えざらんことを命じたり。19ペテロとヨハネと答えていう『神に聴くよりも汝らに聴くは、神の御前に正しきか、汝ら之を審け。20我らは見しこと聴きしことを語らざるを得ず』21民みな此の有りし事に就きて神を崇めたれば、彼らを罰するに由なく、更にまた脅かして釈せり。22かの徴によりて医されし人は四十歳余なりしなり。

23彼ら釈されて、その友の許にゆき、祭司長・長老らの言いし凡てのことを告げたれば、24之を聞きて皆心を一つにし、神に対い、声を揚げて言う『主よ、汝は天と地と海と、其の中のあらゆる物とを造り給えり。25曾て聖霊によりて、汝の僕われらの先祖ダビデでの口をもて「何ゆえ異邦人は騒ぎ立ち、民らは空しき事を謀るぞ。26世の王たちは共に立ち、司らは一つにあつまりて、主および其のキリストに逆らう」と宣給えり。27果たしてヘロデとポンテオ・ピラトとは、異邦人およびイスラエルの民等とともに、汝の油そそぎ給いし聖なる僕イエスに逆いて、此の都にあつまり、28御手と御旨とにて、斯く成るべしと預じめ定め給いし事をなせり。29主よ、今かれらの脅喝を御覧し、僕らに御言を聊かも臆することなく語らせ、30御手をのべて医を施させ、汝の聖なる僕イエスの名によりて、徴と不思議とを行わせ給え』31祈り終えしとき、其の集りおる処ふるい動き、みな聖霊にて満たされ、臆することなく神の御言を語れり。

32信じたる者の群は、おなじ心おなじ思となり、誰一人その所有を己が物と謂わず、凡ての物を共にせり。33斯て使徒たちは大いなる能力をもて主イエスの復活の証をなし、みな大いなる恩恵を蒙りたり。34彼らの中には一人の乏しき者もなかりき。これ地所あるいは家屋を有てる者、これを売り、その売りたる物の価を持ち来りて、35使徒たちの足下に置きしを、各人その用に随いて分け与えられたればなり。

36ここにクプロに生まれたるレビ人にて、使徒たちにバルナバ（釈けば慰籍の子）と称えらるるヨセフ、畑ありしを売りて其の金を持ちきたり、使徒たちの足下に置けり。

●サドカイとパリサイ

1かれら民に語り居るとき、祭司ら・宮守頭およびサドカイ人ら近づき来りて、2その民を教え、又イエスの事を引きて死人の中よりの復活を宣ぶるを憂い、3手をかけて之を捕えしに、はや夕になりたれば、明くる日まで留置場に入れたり。

「かれら」というのは使徒達。と言いましても、主にペテロが語っていた。ペテロとヨハネがいて、ヨハネはほとんどいつも一緒にいては、語るのはペテロ。キリストの復活における永遠の生命の証を使徒たちはせざるを得ないわけです。一般の民に語っていた時に、「祭司ら」とは、もちろんエルサレム神殿の祭司達。「宮守頭」とは、祭司長というのがいて、その次のランクに、この「宮守頭」というのがいるわけです。神殿の、いつもそこに居て司っている頭です。

「サドカイ」と「パリサイ」と、二つの派がありますが、「サドカイ」というのは「パリサイ」よりかもっと古い。「サドク」という、ソロモンの時の祭司、それの子々孫々。即ち、これは祭司の職を世襲的にやっている。けれども、非常に俗的で、いい意味においては文化的なんですが、決して今我々が言うような文化という意味じゃない。政治家とも割合いに共通に連絡をとるようなご連中で、この坊主たちは勢力を少し持った坊主です。

「パリサイ」は、紀元前2世紀頃から始まっているわけですが、ユダヤの律法に詳しいし、それを実践する、宗教的なエリートのご連中です。「パリサイ」というのは

「分かたれたる者」

という意味です。「パリサイ人（びと）」は天使だの、復活をむしろ信ずる方です。「サドカイ」はこれを信じない。けれども、キリストを迫害することにおいては、両方とも共同の戦線をとった。

彼らは、神殿でもって――一向差し支えない――大胆に語っているわけです。サドカイ人は甦りを信じませんから、

「そういうものを民衆が信じたら困る」

というので、とうとう彼らを捕らえてしまった。使徒達は社会的な権力は持ちませんから、すぐこうやって縛られたり、獄舎に入れられたりするわけです。

●サンヘドリン

[4]然れど、その言を聴きたる人々の中にも信ぜし者おおくありて、男の数おおよそ五千人となりたり。

[5]明くる日、司・長老・学者らエルサレムに会し、

「男の数おおよそ五千人」も、ペテロのその証言にみな感じて信じてしまった。

「司」というのは祭司でしょうね。これは「サンヘドリン」と言いまして、「スネドリオン」とギリシヤ語では言うんですけれども、ユダヤの最高会議です。

これはローマ時代から始まっていて、「七十人議会」とも言う。メンバーが70人で、祭司が24人、長老が24人、それから「学者」というのはモーセの律法の学者、これが22人――だから70人ですね――その70人でもって、法律上の民事、刑事、一切の事を議する最高の会議が、これが「サンヘドリン」という。最高会議所と言ってもいいし、議院、法院と言っ

てもいい。

「司（つかさ）・長老・学者」

というのが、そういうご連中なんです。祭司と長老と教法学者。教法学者にはパリサイがたくさんいる。この三種類の者が70人でやる会議です。だから、最高会議をここでやっているわけです。

6大祭司アンナス、カヤパ、ヨハネ、アレキサンデル及び大祭司の一族みな集いて、7その中にかの二人を立てて問う『如何なる能力（ちから）いかなる名によりて此の事を行いしぞ』

だから、正にこれは大がかりなもんですね。その会議の中に、ペテロとヨハネを立てて問うた。病人を治しましたからね。どんな力とどんな名でそんな事をしたのかと、馬鹿気たことを聞くわけです。

●ペテロ聖霊にて満たされ

8この時ペテロ聖霊にて満たされ、彼らに言う『民の司たち及び長老たちよ、9我らが病める者になしし善き業（わざ）に就き、その如何にして救われしかを今日もし訊（ただ）さるるならば、10汝ら一同およびイスラエルの民みな知れ、この人の健かになりて汝らの前に立つは、ナザレのイエス・キリスト、即ち汝らが十字架に釘（つ）け、神が死人の中より甦（よみがえ）らせ給いし者の名に頼（よ）ることを。

特に

「聖霊に満たされ」

と書いてある。もちろん、民に語る時も全部これは聖霊の力で語っているから、五千人も信じたわけです。聖霊の権威ですから、相手がどんな者たちでも、一向に差し支えない。

「サンヘドリンのお偉い方々よ」

というわけだ。ペテロは何十人も相手にして、もう百人以上でしょう、民もみないますから。

「ナザレのイエス・キリスト、即ち汝らが十字架に釘（つ）け、神が死人の中より甦らせ給いし者の名に頼（よ）ることを」

と、非常にはっきりと答えた。この言葉は非常に大事な言葉です。

「お前たちが十字架につけて殺した。ところがどっこい、神さまがこれを甦らせた。そのナザレのイエス・キリストの名によったんだ」

と。

「名によりて歩め」

と言えば――3章の生まれつきの跛者のことですよ――立ち上がってしまった。そして、神を讃美した。

「わが中にあるものを汝に与う。イエス・キリストの名にあって歩め」

と言ったら、立ち上がって躍りだして、喜んでついて行った。生まれつきの跛者を一言のもとに立たしてしまった。これは、

「自分の信仰とか、何とか、そんなことではない。キリストの名の力なんだ」

と。イエス・キリストの御名がそれだけの力を持っている。だから、使徒の次元は凄い。実名、実力です。我々が祈る時に、

「主さま！」

と全身で祈った時に、全身がキリストの中に直ちに入るような祈りでなければ、ダメなんだ。我々は、

「使徒的信仰」

というのは、なまやさしい事ではないですから。もう、それを求め、その次元に在ってでなければ、聖書は本当は読めないということが、いよいよ分かる。この使徒行伝なんかも凄いですからね。

●隅の首石

11 **このイエスは汝ら造家者（いえつくり）に軽しめられし石にして、隅（すみ）の首石（おやいし）となりたるなり。**

「造家者（いえつくり）」とは、神殿のお偉い方々を「家造者」と言っただけ。ところがどっこい、この「石」は、

「**隅（すみ）の首石（おやいし）**」

となったと。お前たちが棄てたと思ったところが、これは「隅の首石」だ、と。キリストはこの「隅の首石」という言葉を好きだった。新約聖書の方々に出ている。最初に出てくるのは、詩篇の118篇。

「**工師（いえつくり）のすていたる石はすみの首石（おやいし）となれり**」（詩篇118・22）

という。これを忘れないように。これは大事な詩篇です。お前たちは棄てたけれども、キリストは隅の首石となったと。この使徒行伝のペテロは大したもんです。

12 **他の者によりては救いを得ることなし、天の下には我らの頼りて救わるべき他の名を、人に賜いし事なければなり』**

「お前たちはモーセ、モーセと言っているけれども、ダメだぞ、モーセでは。キリストだぞ」

と、こういうわけです。今、イスラエルに行って、イスラエル人たちにそういう事を叫ぶ人はいないでしょう、

「いつまでキリストを否んでいるか」

と言ってね。昔も今も同じことだ。

●無学の凡人

13 **彼らはペテロとヨハネとの臆することなきを見、その無学の凡人（ただびと）なるを知りたれば、之を怪しみ、且そのイエスと偕（とも）にありし事を認む。**

「無学の凡人（ただびと）」、「アントローポイ・アグラマトイ」と書いてある。「グラマトイ」というのは「学の有る」という意味で、「ア」がつくと、それを否定するんです。ドイツ語でいうと、「ウン・ゲレールテ」という。

ところが、イエスと偕にあったところのペテロもヨハネもこういう力は持っていない。地上では、キリストは聖霊を与えなかった。申し上げている通り、ルカ伝12章49～50節、あれは非常に大事なところです。

「我は地に火を投ぜんために来た」

と。火とは聖霊のこと。

「けれども、この火をすぐ投ずるわけにはいかない。我には受くべきバプテスマがある。」

と。キリストが

「受くべきバプテスマ」

とは十字架のこと。

「これを受けたらば、十字架を通ったら、今度は聖霊をやるぞ。待っていろ」

と。

「贖罪をしないことには、聖霊は与えない」

というのは、あのルカ伝の12章49～50節ですから、絶対に忘れてはいかん。そのことに、普通の牧師さんも、内村鑑三もそのことにあまり気が付いていなかったらしい。

「イエスと偕にあった」から力が来たのではない。ペテロは、ペンテコステで聖霊を受けて力を賜った。

「天上天下、我らの頼りて救わるべき名は、キリストの他にない」

と。これは、我々クリスチャンは、何も人に言う必要はないですけれども、はっきり意識しなくてはダメです。お釈迦さんをけなすわけじゃないですけれどもね。お釈迦さんで救われる仏教の人たちは、どうぞそれで結構でございます。

「お釈迦さんでは救われない」

なんてそんな事を言う必要は一つもない。

「ただ我々にとっては他にない」

とこういうことです。宗教争いはいかん。他宗を排撃したり。ただ、聞かれたら、

「私にはキリストの他ありません」

と、それだけのはなしだ。お釈迦さんや、有名な第一級の坊さんを私はもちろん尊敬しますよ。拝みはしないけれども。彼らは素晴らしいもの、正直、その次元では。使徒たちと

同じ次元にいるもの。

短い言葉ですけれども、非常に力強い言葉です。ところが、学問があろうが無かろうが、それが

「無学の凡人」

にならなければダメなんです、この世界は。「無学」は「超学」でもいいよ。

「学問のある人は学を超えろ。学に執しているうちはダメだ」

と。学問は大いに尊重します。大いにやってください。けれども、信仰の世界は次元が違うから、超学しなければいかん。学を超えなければ。超学すると、今度は逆に、学を本当に生かすことができる。無縁になるんじゃないですよ。本当に学問をして、あるいは、学術技術を生かすものは、みな越えた世界を持っていなければ。そこが、聖霊の凄いところなんです。

●聖霊の力

聖霊は、あるゆる文化文明の事象に対して、それに光と力と知恵を自在に与える。聖霊というのは、そんな凄い霊だからね。ただ「聖き霊」といって、とり澄ましているのではないのだから。この私自身が本当にそのことを感じているから。でなければ、87歳にもなって、

「これから10年かかって詩を書きます」

なんてバカなことを言えないんですよ。聖霊がなければ、そんなバカなことは言えない。

若い人も、何でもいいから、とにかく或る一つのことに目的を持ったら、それを中心に動いていかなかったらダメですよ。近頃、テレビだラジオだビデオだ何だかだと、とにかく、動き過ぎるね、今の若い人の気持が。見てはいけない、とは言わないよ、ひとつも。ただ

「本当の中心を持っているか」

と、それだけが問題。

私は中学の時から詩が好きだったからね、やっぱり詩の世界が結局、その中心になって段々来たけれども。聖霊をいただいたから、私はこうやって伝道もするけれどさ、聖霊が無かったら、もう伝道なんかできないし、しないし、それから、大体本当の意味で詩も書けない。

だから、あなた方、何をしてても、聖霊の力を本当に持てば、聖霊の知恵と光と力が発動してきますから。それがみな、「超」の世界を持つ。

ペテロは正直、無学だよ。これは漁夫なんだから。パウロは学が非常にあった。学があったけれども、パウロはこれを

「塵あくたの如く思う」

と言ったでしょ。パウロは、その学が全部その書翰の中に溶け込んでいるんです、聖霊の力で。だから、パウロの手紙は凄い。一つも頭で書いてない。

14**また医されたる人の之とともに立つを見るによりて、更に言い消す辞なし。**

「之」というのは、ペテロとヨハネ。どうにもならん。何も、律法に背いたわけじゃないからね、不思議な事をやっただけのはなしだから。

15**ここに、命じて彼らを衆議所より退け、相共に議りて言う、**16**『この人々を如何にすべきぞ。彼等によりて顕著しき徴の行われし事は、凡てエルサレムに住む者に知られ、我ら之を否むこと能わねばなり。**

こうやっていると、結局、

「キリストを信ずる奴が多くなってしまって、ユダヤ教が体制を崩されていく。どうしたらよかっぺ」

というわけだ。

17**然れど愈々ひろく民の中に言い弘らぬように、彼らを脅かして、今より後かの名によりて誰にも語る事なからしめん』**18**乃ち彼らを呼び、一切イエスの名によりて語り、また教えざらんことを命じたり。**

そんな事を命じたって、そんな言う事を聞くか、というわけだ。バカみたいなもんだよ。もう全然ね、次元が違うから。

19**ペテロとヨハネと答えていう『神に聴くよりも汝らに聴くは、神の御前に正しきか、汝ら之を審け。**20**我らは見しこと聴きしことを語らざるを得ず』**

何と言ったって、お前さんたちが「語るな」と言ったって、

「語らないではいられないよ。それは、神さまの御霊の命ずるところだから、お前達の命令なんか聴けるか」

と。

●非連続の連続

21**民みな此の有りし事に就きて神を崇めたれば、彼らを罰するに由なく、更にまた脅かして釈せり。**22**かの徴によりて医されし人は四十歳余なりしなり。**

民は、「さすがは神の人だ」と崇めた。民をみんな向こう側に回すというと、彼らは困るから、懐柔しなければならないから、脅かして許した。脅かしたってダメだよ。

ステパノは、とうとう石に撃たれて最初に殉道の死を遂げたですけれども。それからパウロがひっくり返って、今度は、ペンテコステでは、ペテロ、ヨハネ以下がそう。

だから、キリスト道は、聖霊なくしては本ものではない。キリスト教の歴史が延々と続いているのは、形式的な続き方が随分ありますけれども、その中には、名も無い人たちで本当に聖霊を受けた人たちの、非連続の連続があるわけだ。正に、非連続の連続ですよ。聖書の聖言が人を立たせるからね。

聖霊は、大体、何かにぶつかって――人間とはしょうがないんだよ――全身で受けとる

ところの態勢にないというと、受けとれないからね。頭では受けとれない。分かる分からないの世界じゃないんだ。だから、いろんな事にでっくわして、マイナスの事にでっくわすと、逆にそれを契機として、神さまは捕えるですよ、御霊を与える。どんなマイナスも本当のプラスになってしまう。

パウロにしろ、ペテロにしろ、ヨハネにしろ、ヤコブにしろ、全部、聖霊ということでは一つです。それは、パウロ的、ヨハネ的、ペテロ的、ヤコブ的に、全部それがいろんな現れ方をする。土台は全部、聖霊です。太陽の光は一つだが、バラになったり、ユリになったり、菫になったりする。だから、

「聖霊を宿さざる者はキリスト者に非ず」

と、ロマ書8章のところにある。

●霊震

23彼ら釈されて、その友の許にゆき、祭司長・長老らの言いし凡てのことを告げたれば、24之を聞きて皆心を一つにし、神に対い、声を揚げて言う『主よ、汝は天と地と海と、其の中のあらゆる物とを造り給えり。25曾て聖霊によりて、汝の僕われらの先祖ダビデでの口をもて「何ゆえ異邦人は騒ぎ立ち、民らは空しき事を謀るぞ。26世の王たちは共に立ち、司らは一つにあつまりて、主および其のキリストに逆らう」と宣給えり。27果たしてヘロデとポンテオ・ピラトとは、異邦人およびイスラエルの民等とともに、汝の油そそぎ給いし聖なる僕イエスに逆いて、此の都にあつまり、28御手と御旨とにて、斯く成るべしと預じめ定め給いし事をなせり。29主よ、今かれらの脅喝を御覧し、僕らに御言を聊かも臆することなく語らせ、30御手をのべて医を施させ、汝の聖なる僕イエスの名によりて、徴と不思議とを行わせ給え』31祈り終えしとき、其の集りおる処ふるい動き、みな聖霊にて満たされ、臆することなく神の御言を語れり。

引用は詩篇の第2篇のところです。ここで「異邦人」というのはローマ帝国の人たち。素晴らしい祈りですね。御霊における祈りだから、霊震が起きた。

32信じたる者の群は、おなじ心おなじ思となり、誰一人その所有を己が物と謂わず、凡ての物を共にせり。33斯て使徒たちは大いなる能力をもて主イエスの復活の証をなし、みな大いなる恩恵を蒙りたり。

それだから、みんな同じ心になってしまって、いわゆる私利私欲がないものだから、

「これは俺のものだ、何だかんだ」

と、そんな事は言わないと。

「その所有を己が物といわず、神さまのものだ」

と。いわゆる共産主義じゃないですよ。こういうのを見ると、すぐ共産主義なんて考える奴がいるけれども。

「神さまのものだから一緒だ」

ということ。

34彼らの中には一人の乏しき者もなかりき。これ地所あるいは家屋を有(も)てる者、これを売り、その売りたる物の価を持ち来りて、35使徒たちの足下に置きしを、各人その用に随いて分け与えられたればなり。

36ここにクプロに生まれたるレビ人にて、使徒たちにバルナバ（釈(と)けば慰籍(なぐさめ)の子）と称えらるるヨセフ、畑ありしを売りて其の金を持ちきたり、使徒たちの足下に置けり。

大いに具体的に協力したことが書いてある。

もう完全に、サンヘドリンのご連中に、この議院に勝ってしまったんだ、ペテロ一人で。ヨハネも一緒ですけれども。これは、聖霊の、むしろ証しです。キリストが甦ったことを、ただ語ったってしょうがない。

「かくの如きことであるぞ」

と、もう少し御霊のことを強調して書いたっていいわけですけれども。しかし、その御霊の力は、キリストの名を呼ぶことにおいて働くということは、それはいかに御霊に満ちているか、ということ。御霊に満ちていなければ、名を呼んだって、働きはしませんよ。

●「タイタニック号」の詩

さて、今日は、４月14日は、ちょっと忘れられない日なんです、歴史的に。ある詩を紹介します。この詩は内村先生の『聖書の研究』という雑誌の142号に出ている。この詩を書いた人は、村山元子という女の人です。

［「タイタニック号」の詩を読む。詩の本文省略。〔注〕The Titanic １９１１年に建造されたイギリスの豪華客船。総トン数46328トン。翌年の処女航海で、ニューファンドランド沖で氷山に衝突沈没し（１９１２年４月14日）、1513人が死亡する最大級の海難事故となった。］

"Nearer, my God, to Thee"

「主よ、みもとに近づかん」（讃美歌324）

という讃美歌を、沈みゆく夫や、男の人たちが、これを歌いながら、海にのまれていったんです。それも、非常に整然として一人も卑怯なことをしなかった。非常にうるわしいことなんですがね。（"Nearer, my God, to Thee" を歌う）

藤井先生はこの歌を好きでしたね。